

国語

(古文・漢文を除く)

平成27年10月18日実施

100点満点

医療福祉専門学校

緑生館

平成28年度

●総合看護学科
●理学療法学科・作業療法学科
推薦1期・一般1期入学試験問題

〔注意事項〕

- 1 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 この冊子は25ページあります。問題は第1問～第2問まであります。
- 3 ページの脱落や印刷不鮮明な箇所を見つけた場合には、すみやかに申し出て下さい。
- 4 解答用紙の受験番号欄等の記入に当たっては、受験票に記入した内容と同一になるように注意して下さい。提出する前にもう一度間違いがないかどうか確認して下さい。
- 5 解答は必ず指定された解答記入欄にはみ出したり、薄かったりしないようにマークして下さい。たとえば、問題の文中または文末等に **35** の表示のある問いに対する解答は、下の(例)のように解答番号 35 の解答記入欄に正確にマークして下さい。
その際、解答用紙を汚したり曲げたりしないようにして下さい。

(例)

解答番号	解 答 記 入 欄				
35	1	2	3	4	5
	☐	☒	☐	☐	☐

(悪い例)

1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	塗り残し
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	はみ出し
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	消し残し

- 6 解答用紙は鉛筆でマークした部分を機械で直接読み取りますから、〔注意事項〕を正しく守って下さい。とくに、訂正する場合には消しゴムでていねいに消し、消しきずはきれいに取り除いて下さい。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第1問 次の文章を読んで、後の設問（問1～7）に答えなさい。

私に親しいある老科学者がある日私に次のようなことを語って聞かせた。「科学者になるには『あたま』がよくなくてはいけない」これは普通世人の口にする一つの命題である。これはある意味ではほんとうだと思われる。しかし、一方でまた

I

という命題も、ある意味ではやはりほんとうである。そうしてこの後の方の命題は、それを指摘し解説する人が比較的少数である。この一見相反する二つの命題は実は一つのものの互いに対立し共存する二つの半面を表現するものである。この見かけ上のパラドックスは、実は「あたま」という言葉の内容に関する定義の曖昧不鮮明からうまれることはもちろんである。

論理の連鎖のただ一つの輪をも取り失わないように、また混乱の中に部分と全体との関係を見失わないようにするためには、正確でかつ緻密な頭脳を要する。紛糾した可能性の岐路に立ったときに、取るべき道を誤らないためには前途を見透す内察と直感の力を持たなければならぬ。すなわちこの意味ではたしかに科学者は「あたま」がよくなくてはならないのである。

しかしまた、普通にいわゆる常識的にわかりきったと思われることで、そうして、普通の意味でいわゆるあたまの悪い人にも容易にわかったと思われるような尋常茶飯事の中に、何かしら不可解な疑点を認め、そうしてその闡明に苦吟するということが、単なる科学教育者にはとにかく、科学的研究に従事する者にはさらにいつそう重要必須なことである。この点で科学者は、普通の頭の悪い人よりも、もつともつと物わりの悪いのみ込みの悪い田舎者であり、朴念仁でなければならぬ。

いわゆる頭のいい人は、言わば足の速い旅人のようなものである。人より先に人のまだ行かない所へ行き着くこともできる代わ

りに、途中の道ばたあるいはちよつとしたわき道にある肝心なものを見落とす恐れがある。あたまの悪い人足ののろい人がずっとあとからおくられて来てわけもなくそのだじな宝物を拾っていく場合がある。

頭のいい人は、言わば富士のすそ野まで来て、そこから頂上をながめただけで、それで富士の全体をのみ込んで東京へ引き返すという心配がある。富士はやはり登ってみなければわからない。

頭のいい人は見通しがきくだけに、あらゆる道筋の前途の難関が見渡される。少なくとも自分でそういう気がする。そのためにややもすると前進する勇気を⁽¹⁾阻喪しやすい。頭の悪い人は前途に霧がかかっているためにかえって樂觀的である。そうして難関に出会っても存外どうかしてそれを切り抜けて行く。どうにも抜けられない難関というのはきわめてまれだからである。

それで、研学の徒はあまり頭のいい先生にうっかり助言を請うてはいけない。きつと前途に重畳する難関をしらみつぶしに枚挙されてそうして自分のせつかく楽しみにしている企図の絶望を宣告されるからである。⁽²⁾委細かまわず着手して見ると存外指摘された難関は楽に始末がついて、指摘されなかった意外な難点に出会うこともある。

頭のよい人はあまりに多く頭の力を過信する恐れがある。その結果として、自然がわれわれに表示する現象が自分の頭で考えたことと一致しない場合に、「自然の方が間違っている」かのように考える恐れがある。まさかそれほどでなくても、そういったような傾向になる恐れがある。これでは自然科学は自然の科学でなくなる。一方でまた自分の思ったような結果が出たときに、それが実は思ったとは別の原因のために生じた偶然の結果でありはしないかという可能性を吟味するという大事な仕事を忘れる恐れがある。

頭の悪い人は、頭のいい人が考えて、はじめからだめにきまつているような試みを、一生懸命につづけている。やつと、それがだめだとわかるころには、しかしたいい何かしらだめでない他のものの糸口をとり上げている。そうしてそれは、そのはじめからだめな試みをあえてしなかった人には決して手に触れる機会のないような糸口である場合も少なくない。自然は⁽¹⁾書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人からは逃げ出して、自然の真ん中へ赤裸で飛び込んで来る人にもその神秘の扉を開いて見せ

るからである。

頭のいい人には恋が出来ない。恋は盲目である。科学者になるには自然を恋人としなければならない。自然はやはりその恋人にのみ真心を打ち明けるものである。

科学の歴史はある意味では錯覚と失策の歴史である。偉大なる迂愚者の頭の悪い能率の悪い仕事の歴史である。

頭のいい人は批評家に適するが行為の人にはなりにくい。すべての行為には危険が伴うからである。けがを恐れる人は大工にはなれない。失敗をこわがる人は科学者にはなれない。科学もやはり頭の悪い命知らずの死骸の山の上に築かれた殿堂であり、血の川のほとりに咲いた花園である。一身の利害に対して頭がよい人は戦士にはなりにくい。

頭のいい人には他人の仕事のあらが目につきやすい。その結果として自然に他人のすることが愚かに見え従って自分がだれよりも賢いというような錯覚に陥りやすい。そうになると自然の結果として自分の向上心にゆるみが出て、やがてその人の進歩が止まってしまう。頭の悪い人には他人の仕事がたいいみな立派に見えると同時にまた偉い人の仕事でも自分にもできそうな気がするので自ずから自分の向上心を刺激されるということもあるのである。

頭のいい人で人の仕事のあらはわかるが自分の仕事のあらは見えないという程度の人がある。そういう人は人の仕事をくさしながらも自分で何かしら仕事をして、そうして学界にいくぶんの貢献をする。しかしもういつそう頭がよくて、自分の仕事のあらも見えるという人がある。そういう人になると、どこまで研究しても結末がつかない。それで結局研究の結果をまとめないで終わる。すなわち何もなかったのと、実証的な見地からは同等になる。そういう人は何でもわかつているが、ただ「人間は過誤の動物である」という事実だけを忘却しているのである。一方ではまた、大小方円の見さかいかもつかないほどに頭が悪いおかげで大胆な実験をし大胆な理論を公にしその結果として百の間違いの中に一つ二つの真を見つけ出して学界になにがしかの貢献をしまた誤って大家の名を博することさえある。しかし科学の世界ではすべての間違いは泡沫のようにきえて真なもののみが生き残る。それで何もしない人よりは何かした人のほうが科学に貢献するわけである。

頭のいい学者はまた、何か思いついた仕事があった場合にでも、その仕事の結果の価値という点から見るとせっかく骨を折つても結局たいした重要なものになりそうもないという見込みをつけて着手しないで終わる場合が多い。しかし頭の悪い学者はそんな見込みが立たないために、人からはきわめてつまらないと思われる事でも何でもがむしやりに仕事に取りついてわき目もふらずに進行して行く。そうしているうちに、初めには予期しなかったような重大な結果にぶつかる機会も決して少なくはない。この場合にも頭のいい人は人間の頭の力を買いかぶつて、天然の無限な奥行きを忘却するのである。科学的研究の結果の価値はそれが現われるまではたいていだれにもわからない。また、結果が出た時にはだれも認めなかった価値が十年百年の後に初めて認められることも珍しくはない。

頭がよくて、そうして、自分が頭がいいと思ひ利口だと思ふ人は先生にはなれても科学者にはなれない。人間の頭の力の限界を自覚して大自然の前に愚かな赤裸の自分を投げだし、そうしてただ大自然の直接の教えにのみ傾聴する覚悟があつて、初めて科学者にはなれるのである。しかしそれだけでは科学者にはなれないことはもちろんである。やはり観察と分析と推理の正確周到を必要とするのは言うまでもないことである。

つまり、⁽²⁾頭が悪いと同時に頭がよくなくてはならないのである。

この事実に対する認識の不足が、科学の正常なる進歩を阻害する場合がしばしばある。これは科学にたずさわるほどの人々の慎重な⁽¹⁾省察を要することと思われる。

最後にもう一つ、頭のいい、ことに年少気鋭の科学者が科学者としては立派な科学者でも、時として陥る一つの錯覚がある。それは、科学が人間の知恵のすべてであるもののように考えることである。⁽³⁾科学は孔子のいわゆる「格物」の学であつて、「致知」の一部にすぎない。しかるに現在の科学の国土はまだウパニシヤドや老子やソクラテスの世界との通路を一筋でももっていない。芭蕉や広重の世界にも手を出す手がかりをもっていない。そういう別の世界の存在はしかし人間の事実である。理屈ではない。そういう事実を無視して、科学ばかりが学のように思い誤り思いあがるのは、その人が科学者であるには妨げないとしても、認識の

人であるためには少なからざる障害^(け)となるであろう。これもわかりきったことのようにであつてしばしば忘れられがちなことであり、そうして忘れてならないことのひとつであらうと思われる。

この老科学者の世迷い言を読んで不快に感ずる人はきつとうらやむべきすぐれた頭のいい学者であろう。これを読んで何事をも考えない人はおそらく科学の世界に縁のない科学教育者か科学商人の類であろう。

(寺田寅彦「科学者とあたま」による)

問1 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 1 ～ 5

(ア) 苦吟(クギン)

① 漢文のクホウ

② 神仏にクモツを供える

1

③ 村のクエキに服する

④ 寺院のクリ

(イ) 阻喪(ソソウ)

① 関係がソエンになる

② 事件のソツイ

2

③ 予算のソチを講じる

④ 意欲をソガイする

(ウ) 委細(イサイ)

① 平和のイジ

② 仕事をイタクする

3

③ 経度とイド

④ 野菜をイシヨクする

(エ) 省察(セイサツ)

① 敵の動きをサツチする

② 工事をラクサツする

4

③ 人事をサツシンする

④ 映画のサツエイ

(オ) 障害(ショウガイ)

① 作者フショウの作品

② 自由がホショウされる

5

③ ソショウを起こす

④ 具体とチュウショウ

問2 二重傍線部①～③の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

6

～

8

① 尋常茶飯事

6

- ① 普通のものだが欠かせないこと
- ② ごく普通のありふれたこと
- ③ 何の価値もないどうでもいいこと
- ④ 普通のところで際立つものこと

② 朴念仁

7

- ① 頭が柔らかくて、何にでも対応できる人
- ② 頭が鋭く、論理的に考える人
- ③ 頭の働きは鈍いが、辛抱強い人
- ④ 頭が堅くて、融通のきかない人

③ 天然の無限な奥行き

8

- ① 自然界の計り知れない深遠さ
- ② 自然界と人間との汲み尽きせない関わりの深さ
- ③ 人間社会の予知できない諸現象
- ④ 人間社会に対する自然の排除できない影響の大きさ

問3

本文中の

I

に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

9

- ① 科学者は、「行為の人」でなくてはいけない
- ② 科学者は、「人間は過誤の動物である」ということを認識しなくてはいけない
- ③ 科学者は、「あたま」が悪くなくてはいけない
- ④ 科学者は、「あたま」が悪いと同時によくなくてはいけない

問4 傍線部(1)「書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の中

から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

10

- ① 先ず頭の中で考えて、その後物事にじっくりと取り組む人のこと
- ② 頭の中で考えることはないが、見事な手順で物事を成し遂げる人のこと
- ③ 頭の中で考えすぎて、多くの着想を活かしきれない人のこと
- ④ 頭の中で考えるばかりで、自分で何かを試みることがない人のこと

問5 傍線部(2)「頭が悪いと同時に頭がよくなってはならないのである」とあるが、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

11

① 科学者になるには、自分の能力に絶対的な自信を持つと同時に難関に遭遇しても楽観的に切り抜けていく勇気を持つ必要があるということ

② 科学者になるには、どんなことに對しても大胆な実験を試み、同時に大胆な理論を提示し、多くの思考錯誤を通して、真実を発見して行く図太さが必要であること

③ 科学者になるには、事の成否などとは関わりなく、何にでもひたすら取り組んでいく覚悟と同時に先々のことを見通す内察と直感の力を持つ必要があるということ

④ 科学者になるには、他人の仕事を正しく評価できると同時にどんなことでも自分にも可能だと考え、向上しようとする意欲が必要であるということ

問6 傍線部(3)「科学は孔子のいわゆる『格物』の学であって、『致知』の一部にすぎない」とあるが、この部分の説明として最

も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 12

① 科学は、個々の事象の本質を抽象し、それを現実の諸事象の中で証明して行く学問であるが、証明できるものはほんの一部分にすぎないということ

② 科学は、具体的な事象を観察し、真実を見出していく学問であって、人間が持ち得ているあらゆる知見のほんの一部分にすぎないということ

③ 科学は、実験によって個々の事象の本質を発見していく実践の学であって、人間の全知識のほんの一部分にすぎないということ

④ 科学は、あくまで論理的な統一、整合を求めていく学問であって、得られる成果は多くの研究の中の一部にすぎないということ

問7 この文章で筆者が主張している内容として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 13

① 科学は、人間が存在している世界と関わっており、その意味では哲学や芸術の世界とも関連しており、これらをも含めて認識することが、必要である。

② 頭の「悪い」人は、「人間は過誤の動物である」ということを自覚しているので、失敗を怖がらずに、どんなことにも大胆に挑戦して行くことが出来る。

③ 頭の「いい」人は、予見する能力が高いので、目の前の諸課題を的確に捉え、それらに果敢に挑戦し、多大な成果をもたらしている。

④ 人間の頭の力の限界を自覚して、自然界に関わっていき、ひたすら様々な現象と向き合っていくことが出来てはじめて真の科学者になれる。

第2問 次の小説を読んで、後の設問（問8～14）に答えなさい。

亡君の仇を討った大石内蔵助たち九名は細川家に預け置かれている。初春のある日、細川家の家臣で、世話役の伝右衛門と内蔵助たちが会話を交わしている。

会話の進行は、また内蔵助にとって、面白くない方向へ進むらしい。そこで、彼は、わざと重々しい調子で、卑下の辞を述べながら、巧みにその方向を転換しようとした。「手前たちの忠義をお褒め下さるのはありがたいが、手前一人の量見^{りやうけん}では、お恥ずかしい方が先に立ちます。」

こう言って、一座を眺めながら、

「なぜかと申しますと、赤穂一番に人も多い中で、御覧の通りここにおりますものは、皆小心者ばかりでございます。もともと最初は、奥野将監などと申す番頭も、何かと相談にのったものでございますが、中ごろから量見を変え、ついに同盟を脱しましたのは、心外と申すよりほかはございません。そのほか、進藤源四郎、河村伝兵衛、小山源五左衛門などは原惣右衛門より上席でございますし、佐々小左衛門なども、吉田忠左衛門より身分は上でございますが、皆一挙が近づくにつれて、変心いたしました。その中には手前の親族の者もございます。してみればお恥ずかしい気のするものも無理はございますまい。」

一座の空気は、内蔵助のこの語とともに、今までの陽気さをなくして、急に真面目な調子を帯びた。この意味で、会話は、彼の意図通り、方向を転換したと言っても差し支えない。が、転換した方向が、はたして内蔵助にとって、愉快なものだったかどうかは、自ずからまた別な問題である。

彼の述懐を聞くとまず早水藤左衛門は、両手にこしらえていた拳骨を、二三度膝の上でこすりながら、

「彼奴らは皆、揃いも揃った人畜生ばかりですな。一人として、^⑨武士の風上にも置けるような奴はおられません。」

「さようさ。それも高田群兵衛などになると畜生より劣っていますて。」

忠左衛門は、眉をあげて、賛同を求めるように、堀部弥兵衛を見た。慷慨家の弥兵衛は、もとより黙っていない。

「引上げの朝、彼奴に遇った時には、唾を吐きかけても飽き足らぬと思いました。何しろのめのめと我々の前へ面をさらした上に、御本望を遂げられ、大慶の至りなどと言うのですからな。」

「高田も高田じゃが、小山田庄左衛門などもしようのないたわけ者じゃ。」

間瀬久太夫が、だれに言うともなくこう言うと、原惣右衛門や小野寺十内も、やはり口を斉くして、背盟の徒を罵りはじめた。寡黙な間喜兵衛でさえ、口こそきかないが、白髪頭をうなずかせて、一同の意見に賛同の意を表したことは、度々である。

「なんに致せ、御一同のような忠臣と、一つ御藩に、さような輩がおろうとは、考えられも致しません。さればこそ、武士はもとより、町人百姓まで、犬侍の禄盗人のと悪口を申しておるようでございます。岡林奎之助殿なども昨年切腹こそ致されたが、やはり親類縁者が申し合わせて、^⑤詰腹を斬らせたのだなどという風評がございました。またよしんばそうでないにしても、かような場合に立ち至ってみれば、その汚名も受けずにはおれますまい。まして、余人はなおさらのことでございます。これは、仇討の真似事を致すほど、義に勇みやすい江戸のことと申し、かつはかねがね御一同のお憤りもあることと申し、さような輩を斬つてやるものが出ないとも、限りませんな。」

伝右衛門は、他人事とは思われないような様子で昂然と言いつつ。この分では、だれよりも彼自身が、その斬り捨ての任に当たりかねない勢いである。これに⁽¹⁾扇動された吉田、原、早水、堀部などは、皆一種の興奮を感じたように、いよいよ手ひどく、乱臣賊子を罵殺しにかかった。——が、その中にただ一人、大石内蔵助だけは、両手を膝の上にのせたまま、いよいよつまらなそうな顔をして、だんだん口数をへらしながら、ぼんやり火鉢の中を眺めている。

彼は、彼の転換した方面へ会話が進行した結果、変心した故朋輩の代価で、彼らの忠義がますます褒めそやされているという、⁽¹⁾新しい事実を発見した。そうして、それとともに、彼の胸底を吹いていた春風は、ふたたび幾分の温もりを減却した。勿論彼が

背盟の徒のために惜しんだのは、単に会話の方向を転じたためばかりではない。彼としては、実際彼らの変身を遺憾とも不快とも思っていた。が、彼はそれらの不忠の侍をも、憐みこそすれ、憎いとは思っていない。人情の向背も、世故の転変も、つぶさに味わって来た彼の眼から見れば、彼らの変心の多くは、自然すぎるほど自然であった。もし真率という語がゆるされるとすれば、気の毒なくらい真率であった。従って、彼は彼らに対しても、始終寛容の態度を改めなかった。まして、復讐の事の成った今になってみれば、彼らに与うべきものは、ただ憫笑が残っているだけである。それを世間は、殺してもなお飽き足らないように、思っているらしい。なぜ我々を忠義の士とするためには、彼らを人畜生としなければならぬのであろう。我々と彼らとの差は、存外大きなものではない。江戸の町人に与えた妙な影響を、前に快からず思った内蔵助は、それとはややちがった意味で、今度は背盟の徒が蒙った影響を、伝右衛門によつて代表された、天下の公論の中に看取した。彼が苦い顔をしたのも、決して偶然ではない。しかし、内蔵助の不快は、まだこの上に、最後の仕上げを受ける運命を持っていた。

彼の無言でいるのを見た伝右衛門は、大かたそれを彼らしい謙讓な心もちの結果とでも、推測したのであろう。いよいよ彼の人柄に敬服した。その敬服さ加減を披歴するために、この朴直な肥後侍は、無理に話題を一転すると、たちまち内蔵助の忠義に対する、盛んに歎賞の辞をならべはじめた。

「過日もさる物識りから承りましたが、唐土のなんとやら申す侍は、炭を吞んで唾になつてまでも、主人の仇をつけ狙つたそうでございますな。しかし、それは内蔵助殿のように、心にもない放埒をつくされるよりは、まだまだ苦しくない方ではございますまいか。」

伝右衛門は、こういう前置きをして、それから、内蔵助が「⁽⁷⁾濫行を尽くした一年前の逸聞を、長々としやべり出した。高尾や愛宕の紅葉狩りも、佯狂の彼にはどのくらいつらかったことであらう。島原や祇園の花見の宴も、⁽⁸⁾苦肉の計に耽っている彼には、苦しかったのに相違ない。……

「承れば、そのころ京都では、大石かるくて張り抜き石などと申す唄も、流行りました由を聞き及びました。それほどまでに、

天下を欺きおおせるのはよくよくのことでは出来ずまい。さきごろ天野弥左衛門様が、沈勇だと御賞美になったのも、至極道理なことでございます。」

「いや、それほど何も、大したことではございません。」内蔵助は、不承々に答えた。

その人に倣らない態度が、伝右衛門にとっては、物足りないと同時に、一層の奥床しさを感じさせたと見えて、今まで内蔵助の方を向いていた彼は、永年京都勤番をつとめていた小野寺十内の方へ向きを換えると、ますます、熱心に推服(ひふく)の意を洩らし始めた。その子供らしい熱心さが、一党の中でも通人の名の高い十内には、可笑しいと同時に、可愛かつたのであろう。彼は、素直に伝右衛門の意をむかえて、当時内蔵助が仇家の細作を欺くために、法衣をまつて升屋の夕霧のもとへ通いつめた話を、事明細に話して聞かせた。

「あの通り真面目な顔をしている内蔵助が、当時は里げしきと申す唄を作ったこともございました。それがまた、なかなか評判で、廊中どこでもうたわなかつた所は、なかつたくらいでございます。そこへ当時の内蔵助の風俗が、墨染の法衣姿で、あの祇園の桜がちな中を、浮きさま浮きさまとそやされながら、酔って歩くというのでございましょう。里げしきの唄が流行ったり、内蔵助の濫行も名高くなつたりしたのは、少しも無理はございません。何しろ夕霧と言ひ、浮橋と言ひ、島原や撞木町の名高い太夫たちでも、内蔵助と言へば、下にも置かぬように扱うという騒ぎでございましたから。」

内蔵助は、こういう十内の話を、ほとんど侮蔑(けつ)されたような心もちで、苦々しく聞いていた。と同時にまた、昔の放埒な記憶を、思いだすともなく思いだした。それは、彼にとつては、不思議なほど色彩の鮮やかな記憶である。彼はその思い出の中に、長蠟燭の光を見、伽羅の油の匂いを嗅ぎ、加賀節の三味線の音を聞いた。いや、今十内が言つた里げしきの「さすが涙のばらばら袖に、こぼれて袖に、露のよすがのうきつとめ」という文句さえ、春宮の中からぬけ出したような、夕霧や浮橋のなまめかしい姿とともに、歴々と心中に浮かんできた。いかに彼は、この記憶の中に出没するあらゆる放埒の生活を、思い切つて受用したことであらう。そうしてまた、いかに彼は、その放埒の生活の中に、復讐の拳を全然忘却した駭蕩たる瞬間を、味わつたことであらう。彼は己を

欺いて、この事実を否定するには、あまりに正直な人間であつた。勿論この事実が不道德なものだなどということも、人間性に明らかな彼にとって、夢想さえ出来ないところである。従つて、彼の放埒のすべてを、彼の忠義を尽くす手段として激賞されるのは、不快であるとともに、うしろめたい。

こう考えている内蔵助が、そのいわゆる佯狂苦肉の計を褒められて、苦い顔をしたのに不思議はない。かれは、再度の打撃を受けてわずかに残っていた胸間の春風が、見る見るうちに吹きつくしてしまったことを意識した。あとに残っているのは、一切の誤解に対する反感とその誤解を予想しなかつた彼自身の愚に対する反感とが、うすら寒く影をひろげているばかりである。彼の復讐の拳も彼の同志も、最後にまた彼自身も、多分このまま、勝手な賞讃の声とともに、後代まで伝えられることであろう。——こういう不快な事実と向かいあいながら、彼は火の気のうすくなった火鉢にてをかざすと、伝右衛門の眼をさけて、情けなさそうにため息をした。

それから何分かの後である。厠に行くのにかこつけて、坐をはずして来た大石内蔵助は、独り縁側の柱によりかかつて、寒梅の老木が、古庭の苔と石との間に、的礫たる花をつけたのを眺めていた。日の色はもううすれ切つて植え込みの竹のかげからは、早くも黄昏がひろがるうとするらしい。が、障子の中では、相変わらず面白そうな話し声がづづいている。彼はそれを聞いているうちに、自ずからな一味の哀情が、おもむろに彼をつつんで来るのを意識した。このかすかな梅の匂いにつれて、冴え返る心の底へしみ透つて来る寂しさは、一体どこから来るのであろう。

⁽⁴⁾内蔵助は、青空に象嵌をしたような、堅く冷たい花を仰ぎながら、いつまでもじつと佇んでいた。

(芥川 龍之介 「或る日の大石内蔵助」より)

問8 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 14
18

(ア) リヨウケン

14

- ① 貧乏人へのセリヨウ
③ キリヨウの大きい人

- ② キュウリヨウに依存した生活
④ カンリヨウによる国の統治

(イ) センドウ

15

- ① 飛行機がセンカイする
③ 不治のセンコクを受ける

- ② 大気のおセン
④ 大衆をセンジヨウする

(ウ) ランコウ

16

- ① ランセイの動物
③ 新聞のエツラン

- ② 小説をランドクする
④ お座敷のランマ

(エ) スイフク

17

- ① フクムの規程
③ 上役にフクメイする

- ② 地下にセンプクする
④ 本をフツコクする

(オ) ブベツ

18

- ① 士気をコブする
③ 漢字のブシュ

- ② ブユウにすぐれた人
④ 人をケイブする

問9 二重傍線部①～③の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 19 ～ 21

① 武士の風上にも置けるような奴はおられません 19

② 武士として同じように扱えるような者はいない

③ 武士として相手を敬い、互いに助け合える者はいない

④ 武士として信義を貫き、命までも捨てきる者はいない

⑤ 武士として一生に一度の頼みごとが出来るような者はいない

⑥ 詰腹を斬らせた 20

① 自分の責任を押し付けて切腹させた

② 唆して切腹するように仕向けた

③ すべての責任を一身に負わせて切腹させた

④ 外から圧力をかけて切腹させた

⑦ 苦肉の計 21

① 目的を達するために努力をする手段

② 悩み抜いたすえに苦し紛れに考えた手段

③ どんな過酷な状況をも克服する手段

④ 成功を期し長い間苦勞を重ねて生み出した手段

問10 傍線部(1)「彼の胸底を吹いていた春風は、ふたたび幾分の温もりを減却した。」とあるが、この部分にうかがえる「内蔵助」

の心理の説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

22

- ① 亡君の仇討の成就による充足感が背盟の士を思うことにより苦々しさを交えてきている。
- ② 亡君の仇討を成し得た溢れんばかりの喜びに周囲に気を配る余裕が生まれてきている。
- ③ 亡君の仇討を成し得た満ち足りた安らかさがわずかではあるが薄らいでいつている。
- ④ 亡君の仇討を成就した達成感が世間の賞賛に触れるにつれて冷静さを取り戻している。

問11 傍線部(2)「彼が苦い顔をしたのも、決して偶然ではない」とあるが、この部分にうかがえる「内蔵助」の心境の説明として

最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

23

① 内蔵助は、苦しい思いに耐えてきたのは離脱してきた者たちも同じであることを十分に理解しているため、世間から彼らが不忠であると非難されるのを不当なことだと思っている心境

② 内蔵助は、仇討に関わった自分たちに全ての責任があると考えているのに、離脱せざるを得なかった者まで話題にされていることを迷惑に思っている心境

③ 内蔵助は、仇討を成し遂げることで藩の名誉を回復しようと企図していたが、離脱した者たちのことで藩に悪印象を与えていることを不本意に思っている心境

④ 内蔵助は、仇討から離脱した者たちを許容しているのに、世間では彼らを不忠の士として蔑み、それで自分たちの忠義が褒めそやされていることに、不愉快な思いを抱いている心境

問12 傍線部(3)「彼の放埒のすべてを、彼の忠義を尽くす手段として激賞されるのは、不快であるとともに、うしろめたい」とあるが、この部分の理由の説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 24

① 内蔵助自身、止むを得なかったとはいえ放埒に浸ることがあったのは事実で、武士の在り方としては倫理上許されるものではなく、反省せざるを得ないから

② 内蔵助自身、放埒に身を沈め、仇討のことを忘れてしまっていた瞬間があったことを自覚しており、彼の全ての行動を忠義の為せるものと見做されるのは、やましく、気が咎めるから

③ 内蔵助自身、放埒に身を沈めても、仇討のことを忘れることはなかったという自負があり、放埒そのものを忠義だと称賛されることを認めたくなかったから

④ 内蔵助自身、放埒にうつつをぬかしたのは事実であるのに、悩み抜いた末での手段だと自分を合理化したり、世間から評価されたりするのは間違ったことだから

問13

傍線部(4)「内蔵助は、青空に象嵌をしたような、堅く冷たい花を仰ぎながら、いつまでもじっと佇んでいた」とあるが、この部分にうかがえる「内蔵助」の心理の説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

25

① 亡君の仇討、同士や彼自身についても世間が作り上げた美名を目の前にして、そういう事態を予想すらできなかった自分の至らなさを情けなく不愉快に思っている。

② 亡君の仇討を成就することにより藩の名誉を復活させたものの、このことが世の中にどういう意味をもたらすのか十分に計りかね、先行きを不安に思っている。

③ 亡君の仇討が彼自身や同士たちのどれほどの艱難のうえに成し遂げられた結果であったかということを思うと口に出れないほどの有難さと感謝の思いでいっぱいである。

④ 亡君の仇討が成し遂げられた陰には有形無形の形で彼らを支援してくれた人々の理解があるのに、直接口に出して謝礼できないことに対して申し訳なさを感じている。

問14 本文中の「伝右衛門」と「内蔵助」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

26

① 伝右衛門が仇討を手放しで評価しているものの内蔵助が余りにも謙虚であるのを物足りなく思っているのに対して、内蔵助は伝右衛門が全てについて善意に充ちた受けとめをするのに、辟易している。

② 伝右衛門は内蔵助の放埒については支持しない所もあるものの概して善意を持っているのに対して、内蔵助は伝右衛門の自分たちへの好意を有難いものとして全面的に受け容れている。

③ 伝右衛門が仇討を全面的に支持し、内蔵助の人柄に敬服して、彼の言動全てにわたって好意的に受けとめているのに対して、内蔵助は自分たちに対する評価が実態とはかけ離れていることに気付かされ、次第に気持ち沈んでいっている。

④ 伝右衛門は離脱した者たちが出たことに不満をもっており、そのことが仇討の評価を悪くしていると考えているのに対して、内蔵助は伝右衛門に代表される世間の評価に左右されることなく達成感に満たされている。

